である周辺視野にいくほど、視力が下がる。有効視野は中心視と同時に有効な情報を得て処理できる領域で、注意が惹きつけられるものがあったり、走行速度が上がったりすると狭くなる。

「有効視野によって必要なものを識別する力は、高齢になるほど低下していくことがわかっています。走行中、前方の信号機や標識に注意を向けている時は、若い頃と比べて他のクルマや歩行者を見落としやすくなるのです。そのため、運転中の有効視野が狭くなっていることを高齢ドライバーに自覚してもらうことが必要だと思いました」。

実車で運転中の有効視野を測定することにこだわった奥山さんは、測定に必要な機器を仙台城南高等学校（宮城県仙台市）と共同開発。完成した実車用有効視野測定器は、長さ約185cmのテープ状の素材に赤色のLEDランプを110個（約1.7cm間隔）で配置したもので、ドライバーの中心から左右に何個分の範囲が見えているかを記録できるようになっている。これをクルマのフロントガラスに水平に取り付け、調査研究に協力した高齢者（70～86歳）26名に、R45・日の出自動車学校内のコースを走行してもらった。

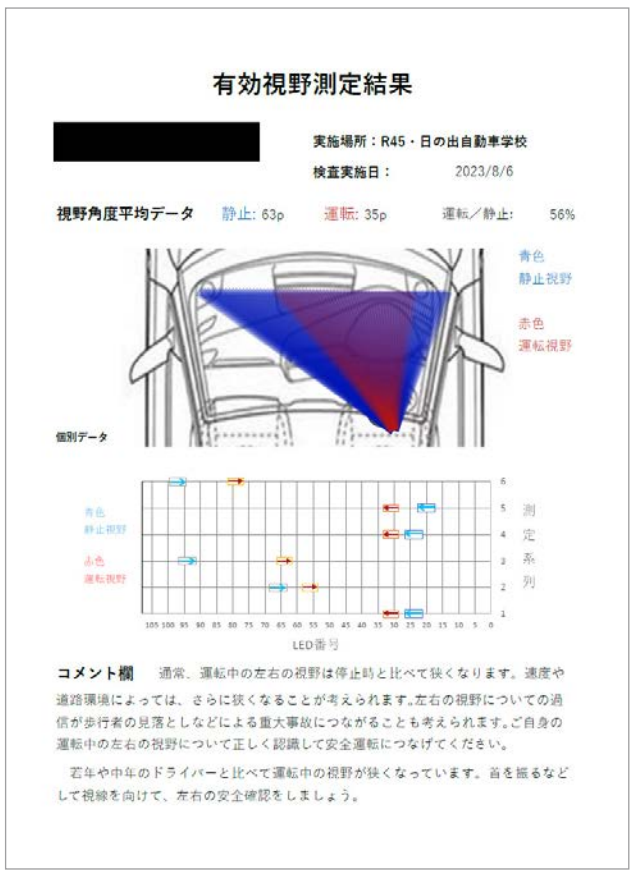
運転する高齢者は、測定器の左右両端のいずれかから点灯されるLEDランプを発見した時に「はい」と発声。発声した際に、点灯していたLEDランプの位置が自動的に記録される仕組みとなっている。測定は停車時と走行中に各々6回（走行中は直線走行時のみ。速度は30km/hと事前に指示）。LEDランプがドライバーの中心から左右に何個分見えているかをLEDランプ1個分の範囲を1p（ポイント）として記録したところ、停車時の視野測定値は平均73p（LEDランプ間隔約123cm）、走行中は平均38p（同約64cm）と、走行中の視野の広さが有意に減少していることがわかった。

また、実車走行による視野測定の後には高齢者とのディスカッションを実施。「有効視野が狭くなったことによって起こりうる事故を防ぐためにどのような工夫が必要かを尋ねると、『スピードを控えて目（視線）を動かすゆとりを持つ』『知らない道を走る時は同乗者と会話しないほうが運転に集中しやすくなる』といった意見が出ました。調査研究に協力していただいた方々は、補償運転の必要性に気づいていただけたと思います」。

調査に協力した高齢者に有効視野測定結果（右）を示し、ディスカッションを実施

有効視野に関する研究は「高齢ドライバーのためのメタ認知教育プログラム開発～運転時の有効視野測定を通じて～」というテーマで、文部科学省が所管する科学研究費助成（科研費）2024年度基盤研究（C）に採択され、2026年度まで継続することが決まっている。

「運転中の有効視野が狭くなっていることを自覚し、それに対する補償運転を考える教育プログラムの開発をめざしています。そして、グループ教習所のネットワークを利用して地域の高齢者の方が集まるイベントを開催し、完成したプログラムを体験できるようにしたいと思っています。トラックやタクシーのドライバーも高齢化が進んでいるので、職業ドライバー向けの講習にも活用できると考えています」と奥山さんは意気込みを語った。



※2 他者の行動を観察したり、他者の意見を聞くことで自己の行動を振り返るという教育手法。東北工業大学名誉教授　太田博雄さんが開発した。

Safety Info. インフォメーション

埼玉県警察が全国初となる高齢者講習の専用施設を開設

埼玉県警察（以下、埼玉県警）が5月27日、さいたま市岩槻区に岩槻高齢者講習センターを開設した。警察が高齢者講習や認知機能検査などに特化した専用施設を設けるのは全国初となる。同センターを設けた背景や施設の特徴について埼玉県警にうかがった。

運転免許の更新期間満了日に70歳以上となるドライバーは、更新の際に実車の運転や座学からなる高齢者講習の受講が義務づけられている。さらに、75歳以上は認知機能検査も受けなければならない。

「高齢者講習に特化した施設の新設を計画した2017年までは、高齢者講習は県内の自動車教習所だけで対応していました（2018年から運転免許センターでの受け入れを開始）。しかし、高齢の運転免許保有者の急速な増加が見込まれており、このままの体制では将来、待ち日数が長期化し、免許更新に間に合わなくなる懸念があったのです。そこで、岩槻高齢者講習センターを新設することで、高齢者の免許更新の利便性を高めようと考えました」と埼玉県警 運転免許課次席 金泉豊さんは説明する。

岩槻高齢者講習センターは講習室20室、認知機能検査室4室、実車指導用のコースを備え、1日当たり高齢者講習120人、認知機能検査180人の計300人まで受け入れが可能。年間延べ約7万5000人の利用を見込んでいる。また、運転能力を評価する装置や、安全運転相談室を設置し、病気などで運転に不安がある人やその家族などの相談も受け付けている。

同センターでは、認知機能検査のためのタブレット端末を20台導入。タブレット端末による検査は、受検者が回答するのと同時並行で自動的に採点され、基準点に達した時点で終了となる。

「音声によるガイダンスや検査員のサポートがあるので、高齢者の方にもスムーズに対応いただけています。紙による検査では回答から採点まで30分かかっていましたが、タブレット端末だと15～20分で終わるようになりました。時間を短縮できた分、受検者数を増やすことができます」と金泉さんはいう。

認知機能検査のためのタブレット端末を導入

このほか、施設内に「体験型交通安全教室」「社会参加・健康づくり事業」「口腔機能ケアの普及啓発」という「シニアに役立つ情報コーナー」が設けられ、来場者に交通安全や健康に関する情報を提供している。

「高齢者講習による教育の機会を通じて、高齢運転者による事故の抑止につなげていきたいと思っています。現在、高齢者講習の待ち日数は平均30日前後です。今後、高齢の運転免許保有者のさらなる増加が見込まれますが、このセンターを有効活用することで、この待ち日数を維持していきたいと考えています」と金泉さんは今後を見据える。

岩槻高齢者講習センターは鉄筋コンクリート2階建て。講習室20室、認知機能検査室4室、安全運転相談室1室などを備えている

実車指導用のコースを併設

運転の診断や検査ができる体制を整備し、運転に不安のある高齢者からの相談にも対応